



做
借
文
庫
—
六
九

59
十
五
五
還
借
の
貸
出

へ 5
1139
59





我々も亦も兼好法師のつふやうに
たうた物うまうもあつて仲るゝ
今更にも成る涙を笑ひて人々を
笑はれ人々を心よりし泣きあふ
還るべき程を送り給へる上へ海へ
舟にのりて是よりあはれき人々
舟よりあはれき人々を舟にのりて

折寄る事なきをうらな
偶成れるはりくまがさ

有る事う新知も昔より十大根馬泉

か頁

うー一子うらめ 風流 中冬牡丹 舎櫻

十蘭聖宗正
賀正年曆

ふみさす 十六此言あは 早ふ花巾糸

か頁

亦一字 添ふことふくを梅茶一笛

か頁

老せね 千葉も入る 秋交

賀六十一歳

一陽 六氣きしハス 川冬生梅 琴城

揚陽の御家近來消廢せり

中々三代に續けられし

十南宮宗正今年還曆成

實政名の親類を

統つて

かゝる人と思われを

浪花津の白ひる

冬を枯

史文叟

紙子下着の袴は仕うて

軍を

十南宮宗正

賀還曆

新暦の正月は花の人

舎田

全

茶花のうらりうらり

鹿幸

合

幾回も代りて御のや外を

魯石

賀還曆

多てすし六十余匹不老門異玄

今

七編の神改二部一多戒五折

外は月花々、移り

還暦一及り

尚其是り驚き分託し多

香印志し一越推林此未孫梅演志

東迄六十匹かえ

高砂中帆五六十今此多保鬼五

祝

一ツあり身し中仇階三ふ代字推敲

望

五く子中く三十九是し尺前や網江

中節く四更

赤心より及く内機燈やとて長藤友

心九かえ

六中何たりとて潤きつし縹吹

十二月朔日寅寅

此れ之辰ふふふ又り年 初曆 波樓

かゝるは白濁の字一

何れとてふ代すは 初よりうふ 排雅

たのふふふふふふふふふふふ

初雪年 月日 不強人ふふふ字 其凉

ふふふ

ふふふふふふふふふ 矢部家 其雄

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふ 暦 万千廿

元還曆

ふふふふふふふふふ 白松家 其祐

ふふふ

ふふふふふふふふふ 珍木

ふふふ

ふふふふふふふ 采成

實

ふふふ 振合ふふふ 其年 其芽

全

一ふふふ 其年 其芽 有字

賀正略

蓬茅や飾りおせし春の一字 寒洞

全

身は玉咲く芳や 尚齒祖 可奴

全

幾代は 齡ひば 眞く六つ花 樂規

祝

枝はる 名は 人より 喜事 馬西

六十は 又た ありしを ぞうて 菊生

賀正略

餅ふ 餅ふ さう人し 何 東志

年か

招は せし 名は 初日 鍛月

今更 磨き せし 名は

百葉の 一歌を 汲み けり

そふ けり 阿や 人ねの 雪 象一

賀

え けり 白ひ やうし 梅 推 琶

全

風 けり 雪 けり 柳 家 佳友

十南河定々本都と
あゝあゝ

よきことし けけろろろ 人そ
むのふ 二俵

佐幸、外盤菜かとも千 後す

十南膏とくしめてきか都か
馬直

妙の還房かろて

破るや六十余刻の老業子
秋白

法かえり道

六河結して怪きに留る
ちの極 智西

祝

不き酒と砂はく六のふる
葵嶋

かえ

唐桑ふりや鶴のふれ
有鳳

還曆賀

侶水

葉して

まことやうの

曆賣

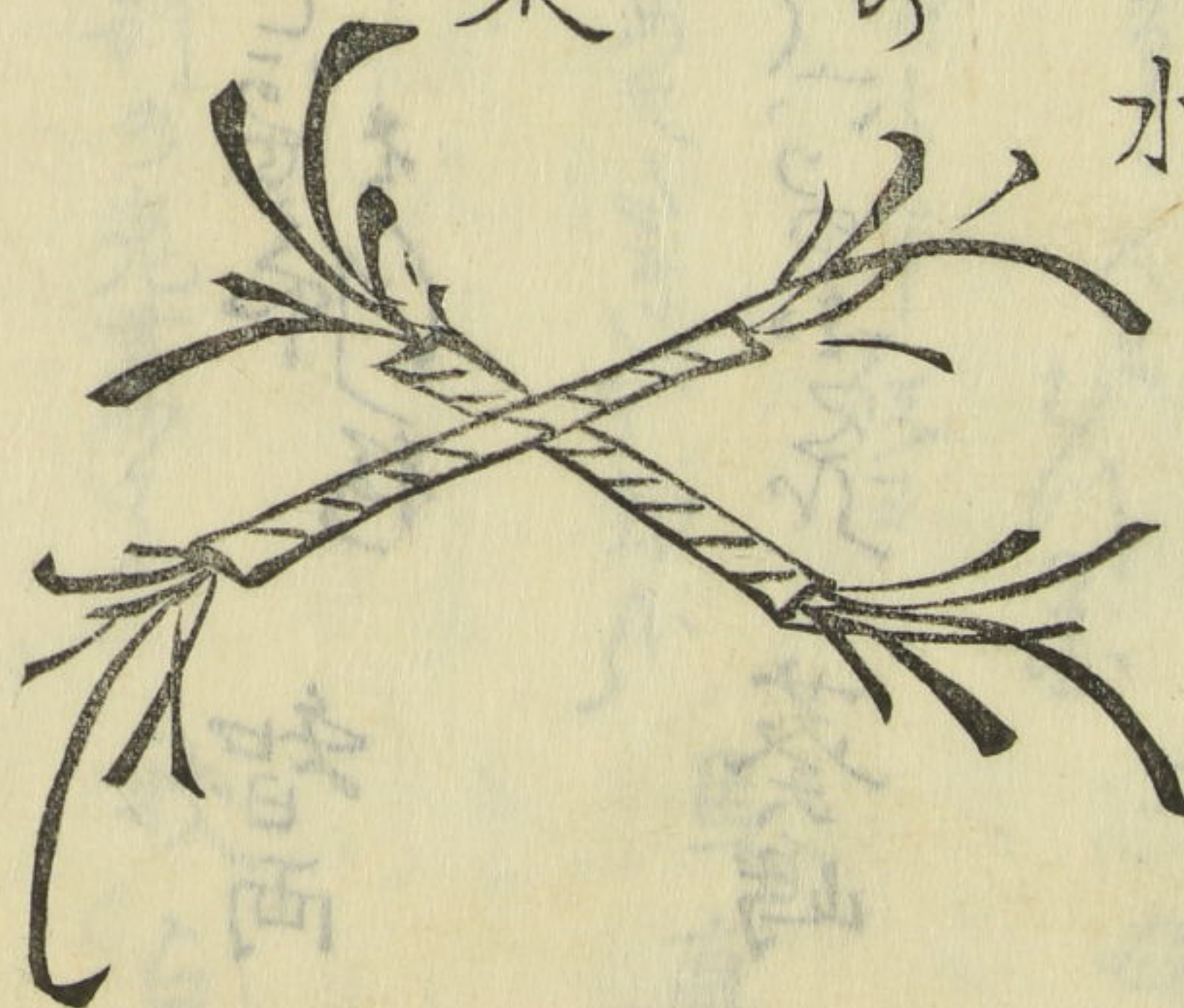
高か

うせ

雨来

房

柄のふ



山崎や

ふまの

うしろ

園巴

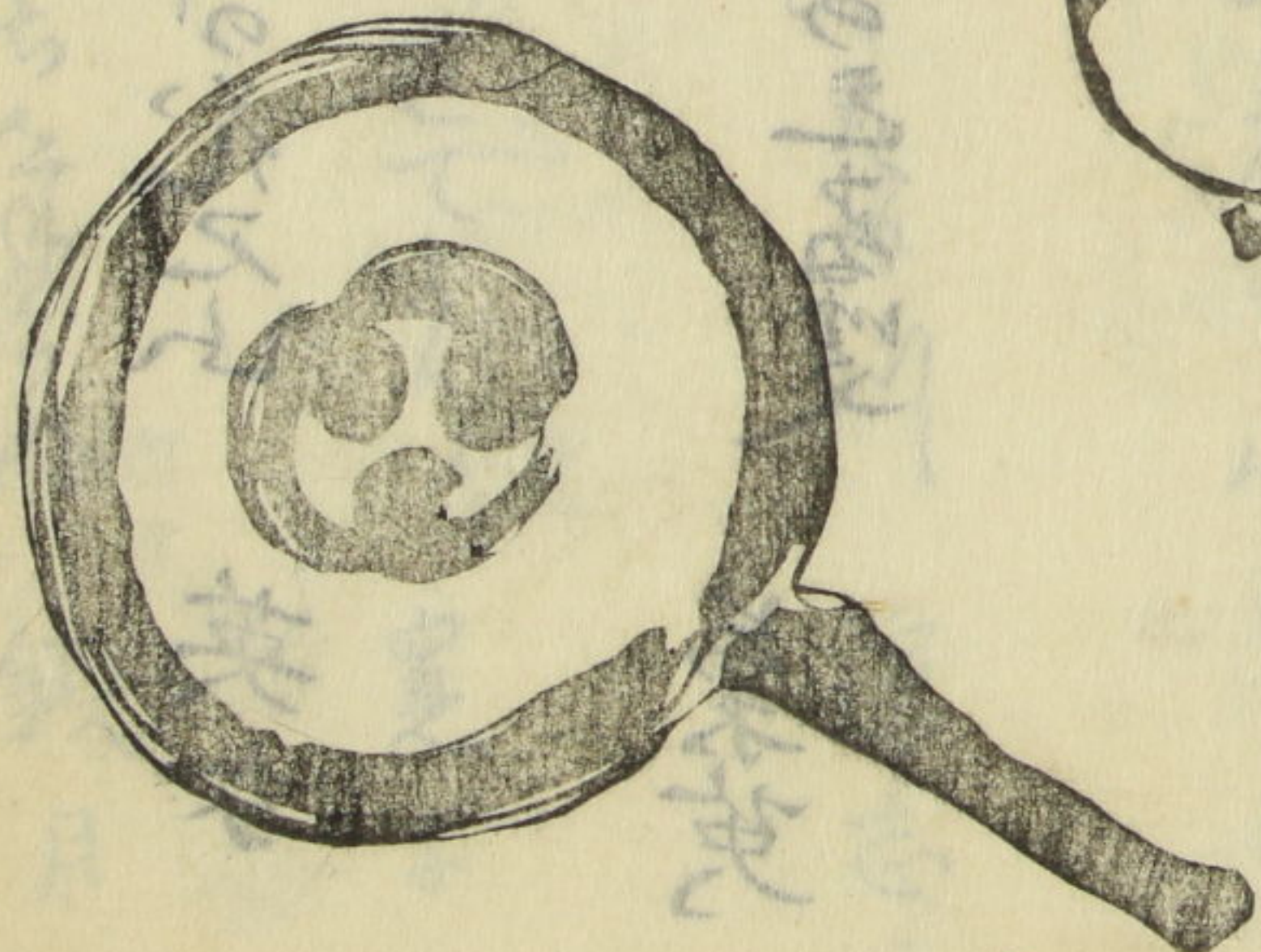


大振袖

六十

歌え

表可



後世にや六津の花乙山 英女

えみふふの海り 菊の乙女 葉英

つとや子孫を 虎子子 子孫を

星々

眼の眼 さられたる藤の川 巾着

極みふふ

松の川 ありては 演志

書ふ

まのや 瑞々 寛子

全

蒼頡の塚より 出づる 鉄月

賀

佐伯卿

從五位上

茶鳳

御平をひきや
まゝく三つお相

祝賀

年が猶む遊業山より高し
むそいんそん所りあられあ

同母

誰れも名人よせん言所の
まゝあゝいそりあゝまゝあ

今

賀

終よまゝあゝあゝあゝあゝあ

身救

祝

まゝあゝ二あゝあゝあゝあゝあ

全
後喜改
鬼眠

還暦花賀の歌

女の人よ是れもや老乃後飯 菅後

十南家の年賀歌

十五の花賀もさうの花 舎良

合

老女も我の根やうの花賀 嵐旋

賀

一陽の来りて長し日此来 可櫻

合

多き事や老女祝受ては白 山ト

還暦歌

振ふの上府も人納まき 馬風

五又の長寿歌

うす月春や万暦六十圖 山ト

四季吟

我徒所 只嘆々 中 柿の花 雪方路

破き 扇 日 成る

朝 方 月 懐 あり 海

あけや 友 又 上下の 隔 あり

賀

老 翁 冬 女 二 夢 や 一 つ 夢 羅山

甲子祭

初 雪 や 足 高 け て 信 仰 此 杆 十 年 留

歌倦川西無行

指 して 南 一 花 又 車 可 那 茶 鳳

細 雨 流 り 不 多 大 に 有 茶 翁

清 雪 中 叢 の 扇 も 似 て 鳥 牧

田 角 か 文 字 を 仮 名 て 丸 の 唇 兎 眠

月 の 招 定 二 小 里 の 糸 ま る 細 江

音 方 カ 子 和 々 隆 々 推 敲

云々

藤衣

振袖の礼名

演志

侍立の衣

米成

金子

有字

一声を

葉芽

障子

赤占

張や

糸一

糸根

銀月

化り

磯江

馬車

馬車

車

鬼工

糸

糸

下略

他郷之部

各賀 おま略

渡列代

生いゝあきふれ月の松乃ふ代迄也

照車

市柳ふ留名もあけやえ日あ

吉

ふり年六十ふもや松の花

里萌

ち十勝もいー一乃更あふふ

鷺新

あふふやふ十ふふ代の若猿

友千

六十余列のふもふふ更あふ

一之

賀

比止と幾指折人あふふ

言叶

そあふやきふふふ持心

可々

十ふりふふふあふふ松のふ

和色

更ふふ又ふふあふふ福寿字

紫蘭

汎ふふ口あふふ月曜日

其然

声ふふあふふあふふ金衣子

亀齡

賀 おま略

あふ枝ふふあ新燈あふ百千鳥

待翁

賀

比上平幾十ころもすみの色 淡引五川腹 艸鼓

る藤中 平を其後節小袖 全 魚園

まう枝を細めく日何り 燈の杖 全 蓮登

二十とせや 名き浪をの花乃足 全 如鏡

まきあをねふ うちさの初ま 全 花明

唐土宗匠此年頃

賀一より侍

矩形珍くぬ十年 全 誇翁

文通

あゝあや 遠小晴るを春の色 伊丹 馬

十五白宗匠の年

あゝあや 遠小晴るを春の色 全 雲郷

賀

まう枝を細めく日何り 燈の杖 有馬 由歌

祝

あゝあや 遠小晴るを春の色 麻田 旭人

歌仙川東真行

ちみきやきりハ酒をふりて	馬直
あきそめあきなり河原に侍	宗翁
夕ア雲のくさぬて悲き午時逢て	演志
底さくそくや水の手かたこ	夏凉
月の影何天去つて教まりふ	推放
静きふく色あきるをり	藤友

秋の白敷に拾ふり	後吹
くらくくふくは起る秋	義喜
肝痛く傾城事とあり	象一
紫入り料理とえ日	呂縁
あまびせ 拙劣く表ひ出る	彼棲
吟く中ハ 膳川に乳	枕雅
檢校子之筋是くあき持ち杖	有字
踏山 松子 閑事 所法	推色

藝功記
編子
入子
了令了

榮英

小
振
初
々
キ
子
厚
分
一
物

永右

中
 花の交の交の交

樂為

心々々々々々々々々々

執事

下略

還曆の賀

一陽
子午
亥
冬至
杓

立烟舍

く 通守 上 祐 也 五 五 の 文

壯尾新

全

[illegible]

芙蓉搭

還原此如子行

廣くともかゝる世に於て
 ありしかる世に於て

鼎移舍

賀

むすひしつゝも子代をきき舞妓の

足音

樂只堂

全

幾ふ代やなつて枝を 錦造

恒盛坊

全

錦急川 古く還る鷹 賣

清汎舍

全

人る水端り候あり 室乃梅

佳月亭

全

四半の縁よりし 塙やきき松

平陽堂

全

老乃名水葉へ久しき松の冬

千峯坊

全

臨波ある梅よりなり 卯永月

方圓亭

全

竹葉の甜き 鈴よ 百あふ

水之軒

歌仙

老らる小春の雪や面白き

談翁

るるををへ咲物ふ石莖

茶翁

るるををへ咲物ふ石莖

向曉

淡海しる久もつる

貞国

秋の月をひくす月のお

茶

寺上寺下 秋を築へる

淡

画の鷹乃年芳 秋平猿の空

国

襖をささけおきる

曉

二度目をふ夜と恋のお定め

談

筑戸の幸抱 瑞庵と焼く

茶

日影しる新玉川のをある

曉

るるををへ咲物ふ石莖

談

百余年一ひきく 的とあり

茶

せんすん 茶師運ふる

国

文海の隣りてるる冬は月

冬は海に遠く杜夫魚の口

毛毬もこそ大月冬乃幕

いふはる中級幾ふ代

十南の宗道こそし
中級の宗道こそし

ひとし中雪を産るる

玉棧

古有堂

國 雙 榮 筆

年
ル
ト

